

# 龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜

持田大輔

## はじめに

古代東アジア地域で数多く出土する環頭大刀、特に環内飾りとして龍や鳳凰を採用した龍鳳文環頭大刀は、中国の史書に記述がみられるほか、朝鮮半島（以下、半島とも表記）と日本列島（以下、列島とも表記）で多く実物資料が出土し確認されている。従来より型式学的検討をふまえて、日本列島出土の龍鳳文環頭大刀の古式例は朝鮮半島から持ち込まれた資料であり、その他多くの環頭は朝鮮半島で製作されていた環頭大刀に祖形を求める得る点が指摘されてきた。

ここで問題となるのは、朝鮮半島で製作された環頭大刀から列島内で生産された環頭大刀へと切り替わる時期を、どの段階に求めるかである。例えば、6世紀末以降の板造の双龍鳳環頭大刀は、列島内の生産品であることには異論を見ない。しかし、その前段階である鑄造製単龍鳳環頭大刀に関しては、列島内製作の開始時期がどこまで遡るかは研究者によって見解が分かれている。

朝鮮半島など外部から持ち込まれる段階と列島内での生産段階とを区別すること、そしてその時期についての解釈は、現在、自明のように語られている龍鳳文環頭大刀やその他裝飾付大刀に対して、配布論や職掌、氏族系譜などを関連づける評価にも影響を与える内容である。従って、古墳時代後期の社会像の一端を復原するためには、生産段階の区別は不可欠な作業といえよう。

本稿では現時点の代表的な論説や意見をまとめた上、資料を再検討して龍鳳文環頭大刀の日本列島における受容に関する点について特に考察したい。

## 1. 列島内生産と製作系譜に関する議論

龍鳳文環頭大刀の受容以降、列島内での生産開始までは、大別して次の3段階に分けることができる。すなわち、第1段階として舶載品が入ってくる段階、第2段階として渡来系工人による列島内での製作開始の段階、第3段階としてその後も連続して製作される体制が確立し、独自のデザインや技術を用いて製作される段階が想定できる。

上述の諸段階について整理を行った橋本英将氏は、「国産化」の開始時期を「半島から渡来した工人が倭で製作にあたった場合などは国産化とは呼ばない」と定義して第3段階（橋本の第2段階）においている（橋本2003）。しかし本稿で検討を試みる龍鳳文環頭大刀受容期の製作の実

態は、舶載品段階である第1段階を除いた第2段階以降、渡来系工人の製作した段階を含めている。渡来系の工人が舶載品のデザインを忠実に模倣し、また同じ技術を使用したという前提から、この段階は、舶載段階の製品との判別が難しいとされる。そこで、列島内製作の開始時期に関する先学諸氏の代表的意見を概観してみる。

新納泉氏は、単龍鳳環頭大刀の分類と編年を行い、その編年観は現在の基本型となっている（新納1982 以下、新納編年と表記）。列島内での製作開始時期については明確にしているが、単龍鳳環頭のⅢ式にあたる岡山県岩田14号墳例に対し、倭で作られた模倣品との評価を行っている（新納1989）。穴沢味光・馬目順一氏は、彼らの第3段階の前半は舶載、後半が舶載と仿製国産が相半ばする状態であるとする（穴沢・馬目1986）。穴沢・馬目氏の述べる第3段階は、新納編年のⅢ式、Ⅳ式にあたり、ほぼ同時期を想定されている。

一方、町田章氏は氏の設定する第5段階後半（＝6世紀第4四半期）以降を倭国で模倣した製品とする（町田1987）。これは新納編年Ⅵ式以降と判断され、2段階ほど時期的に下っている。このように列島内製作開始の時期に関しては、Ⅲ式からⅥ式までの異なる見解があり、隔たりが大きい。新納編年を基準とした場合、Ⅳ式とⅥ式の間には40年ほどの開きがみられる（新納1987）。この開きは龍鳳文環頭大刀単独の場合だけでなく、他形式の環頭大刀の出現、例えば松尾充晶氏が指摘するように、装飾付大刀の画期の評価と実年代と関連づけて検討する場合、大きな問題が派生してくる（松尾2003）。

また、日本列島での生産開始の問題について議論される際、同じく俎上に上るのは、龍鳳文環頭大刀のもともとの由来地はどこかという点である。この問題に関して、先学諸氏は百済の系譜を継ぐ大刀であるという認識で一致している。例えば新納氏の場合、日本列島出土例の型式学的検討から、百済武寧王陵出土例が源流であると指摘した。また、町田氏は、伽耶地域に広範囲に王権を示すような体制が生まれなかったことなどを指摘し、百済の工房で製作され下賜されたと考えたのである。

以上のように龍鳳文環頭大刀の列島内生産の画期は、研究者ごとに時期差が認められる点、また龍鳳文環頭大刀の由来は、百済地域に求めるという認識が大勢を占めている。

## 2. 日本列島出土の龍鳳文環頭について～標識遺物の再検討～

### 1) 意匠による編年と技術の変遷

現在、龍鳳文環頭大刀、特に単龍鳳環頭大刀の編年として使用されている新納編年は、環内飾りおよび外環部に施された龍文意匠の型式組列の変遷を追うものである。武寧王陵出土の単龍環頭を祖形のⅠ式として、Ⅵ式まで分類・編年を行っている<sup>(1)</sup>。この編年で示された型式変遷は、すでに研究者に受け入れられているところであり、この点については筆者も異論は無い。ただし、その環頭製作に使用されている技術とその変遷については、検討の余地がある。







I 式	I 式	II 式	III 式	III 式	IV 式
					
1 武寧王陵	2 北牧野2号墳	3 海北塚古墳	4 一須賀 WA1 号墳	5 慶應義塾大学 K128	6 山王山古墳
技法 a		技法 b		技法 c	
一鑄?	別鑄			一鑄	
鍍金	鍍金	外環=金貼		鍍金	
		環内飾り=鍍金			

図1 意匠による編年とその製作技術

まず、武寧王陵出土の環頭である(図1-1)。環頭は外環、環内飾りともに一体で鑄造され、全体に鍍金を施して仕上げられている。また、環頭以外では筒金具部分が細金細工で製作されるなど、他に例を見ない。次にII式の大阪府海北塚古墳例では、外環と環内飾りが別々に鑄造されたのち、付け根部分に柄を造り出して組み合わせている(図1-3)。また外環は金貼りを用いるのに対して、環内飾りは鍍金で仕上げている。柄部分に金が貼られていないことを勘案すると、別々に仕上げられた部品を組み立てたと想定できる。III式として例示されている大阪府一須賀WA1号墳例(図1-4)は、II式の海北塚古墳例と同様に外環と環内飾りの仕上げをそれぞれ金貼り、鍍金で仕上げている。しかし、外環と環内飾りは一体で鑄造している。これ以降のIV・V・VI式は、外環と環内飾りが一体で鑄造され、III式までの外環金貼りの技術が消失し、全体を鍍金で仕上げられるようになる。

以上が、新納編年の標識資料として使用されている環頭の製作技術である。龍文意匠は従来から説かれている通りI式~VI式まで変遷するが、製作技術の点からはI式とII式の間とIII式とIV式以降との間に断絶が認められる。この技術の断絶に関しては新納氏は工人差に起因する現象と評価している。

2) 単龍鳳I式~II式の断絶(技法a・b)

最初の断絶であるI式とII式の間位置づけられる資料として、滋賀県北牧野2号墳出土の単龍環頭を挙げ得る(図1-2)。この環頭は、龍文の意匠は武寧王陵例に酷似するが、鱗表現が粗い。II式の海北塚古墳例と比較すると、龍首部分の表現が北牧野例が丸みを持ち立体的な表現であるのに対し、海北塚古墳例は扁平化、形式化している。これらの点から武寧王陵例と海北塚古墳例の中間に位置する資料として評価できる。この北牧野2号墳例の製作技術は、外環と環内飾りともに鑄造、鍍金で仕上げている。ただし報告によると、外環と環頭部の成分分析で多少差異

がある点、X線写真では龍首の付け根部分に僅かに透けている部分がある点から別造りという可能性が指摘されている。外見上は武寧王陵例と酷似しており、武寧王陵例も別造りの可能性があるかもしれない。以上の様な製作技術の類似点から、現時点ではこの資料についてもI式としておきたい<sup>(2)</sup>。

これまでI式とII式についてはそれぞれ1例しかなく、特に武寧王陵例は、その他大刀装具の特異性から、製作技術の面から標識とするのを躊躇された。しかし北牧野2号墳例によりI式段階には確実に鑄造鍍金仕上げを行う事実が確認できた。外環と環内飾りが一鑄か別鑄かについては、武寧王陵例について再検討を要するが、仕上がりの段階で外環、環内に差が無いよう配慮している点は注目すべきである。従って、II・III式にみられる外環金貼り・環内飾り鍍金の製作法とは断絶が存在することは明らかである。I式の製作技術を用いる段階を技法a、II式の製作技術を技法bとしておく。

### 3) 単龍鳳II・III式～IV式以降(技法c・d)

先に標識資料として掲げたのは、一須賀WA1号墳例であったが、他にも岡山県岩田14号墳例、福岡県日拝塚古墳例、慶應義塾大学K128例(図1-5)、K224例が挙げられている<sup>(3)</sup>。これらのうち、外環金貼りをを行うのは一須賀WA1号墳例、岩田14号墳例と日拝塚古墳例である。これらは、仕上げの方法は金貼・鍍金併用というII式以来の技術を使用しながらも、一体鑄造というIV式以降の要素をあわせ持っている。これを技法cとする。

一方、慶大K128・K224例は一体鑄造・鍍金で製作され、むしろIV式以降の製作技術と共通しており、技法dとしておこう。III式以降の環頭に関しては、意匠からも、製作技術に関しても変遷しながらも連綿とつながると考える。

以上の検討から、意匠の編年からIII式に位置づけられる環頭には、技法cと技法dの二つの技法が用いられていることが指摘できる。一方、技術面から検討すると、技法b・c・d間に変遷を追えるが、技法aは技法dが最も近く、時期的に近い技法bとは断絶がある。技法aの武寧王陵例と技法dの資料を比較すると、武寧王陵例は鍍金の発色が鮮やかで、技法dのくすんだ色あいとは明らかに異なる。この本来の発色を求めるために金貼り技術を導入し、複雑な立体の環内飾りには鍍金を導入したと解釈できる。

したがって、日本列島出土の単龍鳳環頭は、意匠からは百濟武寧王陵例、製作技術からはII式の海北塚古墳例が直接的に遡れる遺物である。つまり、技法aを用いるI式の武寧王陵例と技法b、c、dを用いる日本列島出土の環頭には断絶がある。

## 3. 朝鮮半島出土の龍鳳文環頭製作技術の検討

### 1) 龍鳳文環頭の故地に関する諸見解

前章では新納泉氏による龍文意匠による分類と編年、製作技術について比較検討を行った。こ

の環頭製作技術からのアプローチは、すでに町田章氏の一連の研究によってなされている（町田1976・1986・1987）。町田氏は、環頭部の製作技術により、A型・B型・AB型の三分類を行っているが、これらA・B・AB型の環頭については町田氏はすべてを百済系統の遺物であると推定している。その根拠について、A型は百済ではなく伽耶地域に多く出土することを認めた上で、規格性と特定の古墳に限って出土する特殊な環頭大刀であること、伽耶諸国での製作よりも百済での製作を考えるべきであることを述べ、伽耶諸国王が百済の郡令、城主などの官制に組み込まれ、その表章として百済王から下賜された大刀であるとする。また、B型は武寧王陵例を標識資料とし、武寧王陵が南朝の墓制を採用し南朝系遺物も出土していること、武寧王は中国南朝・梁に朝貢し521年に「使持節都督百済諸軍事寧東大將軍百済王」に册封されていることから、その際に授けられた節刀の可能性が高いとする。したがってB型は南朝製とその模倣品であるとし、その成立は南朝下賜品とする武寧王陵資料のインパクトによるものと想定している。また、A型・B型の特徴を持つAB型は百済で製作された折衷品と考える。

他にも穴沢・馬目氏は武寧王陵刀が百済製の可能性を指摘し、（穴沢・馬目1984）、これらの技術水準からA型環頭を百済製とみる（穴沢・馬目1993）など、龍鳳文環頭大刀はその製作技術の差異に関係なく、百済の系統とみるのが、一般的な解釈であった。

2) 朝鮮半島での龍鳳文環頭大刀分布（図2）

A型環頭は伽耶地域を中心に、新羅地域でも出土している。特に陝川玉田古墳群では、M3号墳、M4号墳、M6号墳などから多量の龍鳳文環頭大刀が出土している。新羅地域では、慶州壺杵

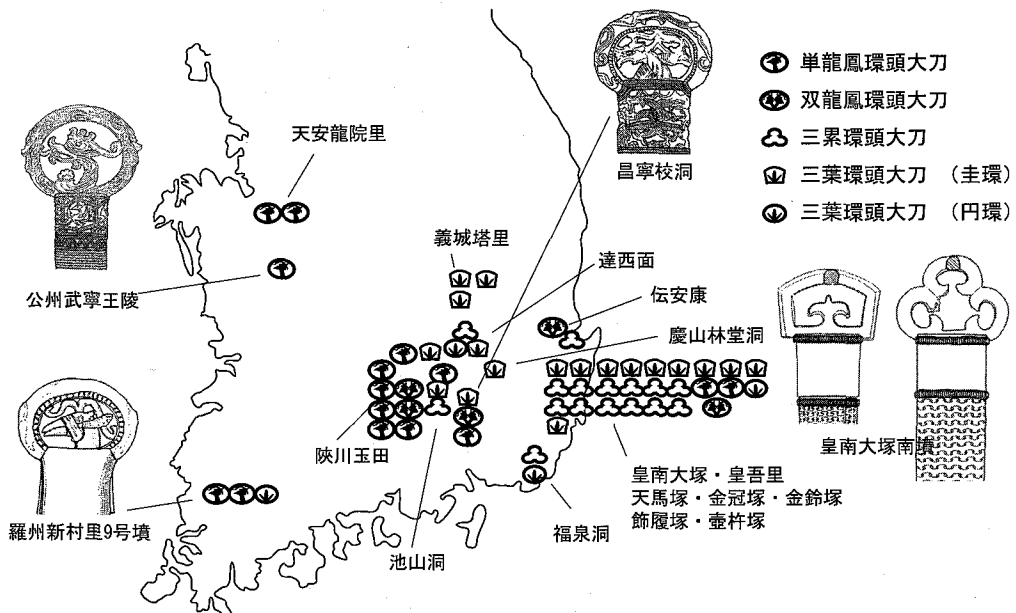


図2 朝鮮半島の装飾環頭大刀出土分布図

塚や飾履塚をはじめ、大伽耶に近い昌寧校洞古墳群などで出土している。ほかにも、羅州新村里古墳群など、朝鮮半島西南部でも出土している。B型龍鳳文環頭では朝鮮半島内で発掘調査による出土地が確認できるのは武寧王陵例のみで、そのほか出土地不明が数点ある。AB型に関しては、出土地が確定するものはなく、東博蔵の伝昌寧出土例のみである。

以上の状況を検討すると、特にA型龍鳳文環頭が洛東江中流域の伽耶地域に集中する点を認め得る。そしてB型、AB型龍鳳文環頭は、出土例が少なく判断が難しい。この状況は、80年代から変化せず、とくに伽耶地域の調査の進捗によってより明瞭になってきたといえる。

一方、他の型式の環頭大刀とくに三葉環頭大刀や三累環頭大刀は、慶州の王陵や洛東江東岸などの新羅地域に分布している。皇南大塚や天馬塚など慶州の王陵では三累環頭大刀がまとまって出土するのに対して、その他の地域では三葉環頭大刀が多い。この点に関して、三累環頭大刀が三葉環頭大刀と比較して高位に位置づけられるという指摘が穴沢・馬目氏によりなされている(穴沢・馬目1984)。

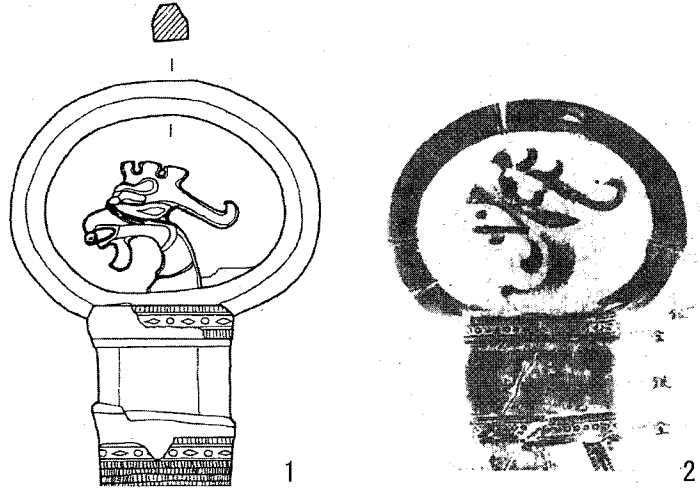
新羅・伽耶の緩衝地域などで龍鳳文環頭大刀と三累環頭大刀、三葉環頭大刀が混在する状況が認められるが、伽耶・新羅それぞれに中心地に偏りがある。したがって、A型の龍鳳文環頭大刀を伽耶系<sup>(4)</sup>、三累環頭・三葉環頭大刀を新羅系として捉えるのが自然であろう。この結論は大谷晃二氏の指摘と同様であり、氏はそれぞれ伽耶式、新羅式の名称を付している(大谷2006)。

さて、A型龍鳳文環頭大刀の製作地として有力視されてきた百済地域では、龍鳳文環頭大刀が漢城百済期とされる天安龍院里で2点出土している。ほかには公州武寧王陵で1点確認されるのみである。朝鮮半島出土の龍鳳文環頭大刀としては最古級とされる天安龍院里の2例は、鉄地金貼、銀貼で製作されている。技術としては伽耶系のA型龍鳳文環頭と差はなく、百済の工房で伽耶系A型龍鳳文環頭大刀が製作されていた可能性は否定できない。しかしこの分布の状況からは、百済地域の貴人層に龍鳳文環頭大刀が用いられていたかも疑問である。伽耶系のA型龍鳳文環頭大刀は百済から下賜されたと捉えるよりも、むしろ伽耶製と考えるのが妥当であろう。伽耶での金工品の製作工房の存在は、伽耶式の冠や耳飾りの存在から想定できる。また、B型は確実な出土例が武寧王陵の資料のみである。中国南朝製との意見もあるが、類例の出土が見られない為、百済の系統と考えておきたい。

### 3) 銀貼有稜素環を持つ龍鳳文環頭大刀

AB型に分類できる龍鳳文環頭のうち、特殊な例が幾例か散見される。福岡県箕田丸山古墳出土の単龍環頭大刀は、外環が鉄地または銅地金貼、環内飾りの龍体は鍍金で、それぞれ別造りに見受けられる資料である(図3-1)。この環頭で特徴的なのは、外環部が稜を有する素環で、断面六角形を呈することである。このような外環は、新羅系の三葉環頭大刀に多く見られる。新羅系の三葉環頭大刀は、外環が圭環、または円環で、鉄または銅地金・銀貼り、内部の三葉文が別造りで鍍金をされている。

この類例は非常に少なく、管見では江藤正澄氏旧蔵品が確認されるのみである(図3-2)。この環頭は既に所在不明であるが、柴田常恵氏の拓本が残されている。それによると、外環は有稜素環であり、おそらく断面が六角形である。鉄地か銅地かは判然としないが、銀貼りである。環内飾りの接合法や仕上げは不明であるが、珠を銜えてい



1. 箕田丸山古墳 2. 江藤正澄氏旧蔵

図3 有稜素環の龍鳳文環頭(1は1/2、2は約1/2)

る点から単鳳環頭である。また、銀製の筒金具の両端には、金製の双連珠魚々子文を打ち出した貴金具が装着されている。単鳳の冠毛がはっきりと表現される点など古式の様相を考慮すると、Ⅲ式とされる箕田丸山例よりⅡ式の段階まで遡る可能性もある。貴金具への双連珠魚々子文の採用は伝昌寧出土刀が知られているが、朝鮮半島製との見解(大谷2006)も示されている。Ⅲ式から出現する珠を咬む意匠を含め、龍を意匠したそれまでの龍鳳文環頭大刀の主流とは別系統の大刀である。

これらの環頭の存在は、Ⅱ～Ⅲ式段階において百済・伽耶系の他にも新羅系の複数要素を持つ龍鳳文環頭が存在している点に注意を促すものである。

#### 4. 「AB型環頭」の製作地とその実態

A型を伽耶製、B型を系統不明ながら百済系とし、またAB型のバリエーションとして、有稜素環を持つ龍鳳文環頭大刀も存在することを指摘した。そこで、通説であった町田氏によるAB型環頭百済製説に対して、再検討を行いたい。

日本列島出土の単龍鳳環頭大刀の祖形が、意匠の面から百済系B型環頭の武寧王陵例や北牧野2号墳例に求められるの確実であろう。製作技術、特に仕上げの面では、海北塚例の技法bと伽耶系AB型環頭とは近似しており、百済系の意匠をもとに伽耶系の技術を使用して製作されたと考える。伽耶地域で製作されていた可能性や、新羅の伽耶侵攻に伴って工人が新羅へ移動し、同地域で製作された可能性もあるが、むしろ第三国である日本列島内での製作の結果と考えたい。特に、Ⅲ式以降、意匠と製作技術が連続することや、出土数が増大する点から検討すると、Ⅲ式

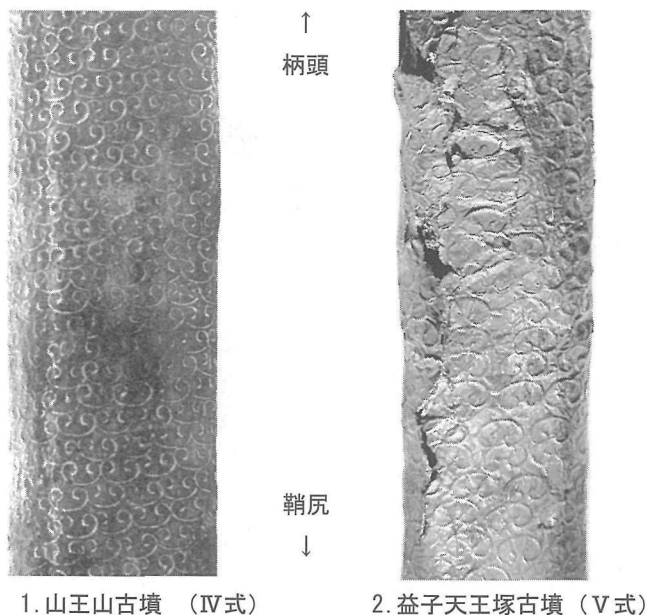


図4 鞘部銀板の鱗状文

の時期に伽耶系技術保持者たちによって製作され始めたともみたい。同時期には有稜素環をもつ龍鳳文環頭大刀も製作されている。伽耶系の技術者が外環を走龍文・金貼で製作する技法にこだわるように、新羅系の技術者が素文銀貼りで製作する技法にこだわったと想定できる。環頭以外の装具に目を向けると、環頭直下の筒金具は銀板、その両端の貴金具は銅地金貼の双連珠魚々子・菱形文である。この装具の組み合わせはⅢ式の一須賀WA1号墳例、岩田14号墳例と

共通である。そしてⅣ式の慶應大K128例、千葉県山王山古墳例などにも引き継がれる装具の構成である。したがって、環頭以外の装具が共通認識の下で製作されている点から見ても、このⅡ～Ⅲ式段階は百済系の意匠、伽耶系・新羅系の技術という朝鮮半島各地の要素が入り交じりながらもまとまった体制で製作している状況が想定できる。

また、時期が下るⅣ式、Ⅴ式段階の単龍鳳環頭大刀の鞘に銀板を巻く装飾が施される(図4)。これらの銀板には鱗状文が施されており、新羅系大刀の柄部に巻かれていた銀板を彷彿とさせる。先に検討した有稜素環の龍鳳文環頭大刀が存在した点を考慮すると、この鱗状文銀板に関しても新羅系の要素の名残であるとも考えられる。

### まとめ

本稿では、日本列島出土の龍鳳文環頭大刀、特に単龍鳳環頭部分の製作技術の検討をもとに日韓出土の環頭大刀の比較を行った。その結果、A型龍鳳文環頭の百済製説に対して、伽耶地域での生産を指摘した。また、6世紀後半の日本列島で展開する単龍環頭大刀が百済系の意匠をもとに伽耶系の技術で製作され、また新羅系の要素も存在する事実を指摘した。以上の製作技術面の検討や、分布の状況から、百済系や伽耶系、そして新羅系の三要素を交えて製作される龍鳳文環頭大刀は、第三国である日本列島内で製作されたと想定した。

さて、検討課題であった日本列島内での製作開始期は、提示した製作段階のうち、「渡来系工人による製作の段階」にあたる。この段階の製品は舶載品のデザインを忠実に模倣し、また半島



と同様の技術を使用した場合、「輸入品」主体の第1段階の製品と見分けることは困難と想定してきた。しかし朝鮮半島と列島内製品との製作技術と意匠の比較により、半島製品との差異を僅かであるが見いだせた。

一方で日本列島での製作開始期以降も、朝鮮半島から製品が持ち込まれるなど、あらたなインパクトがあった事実も想定しなければならない。すでに大谷氏が環頭部分の製作技術や外環の走龍文の詳細な検討から、その可能性を示している(大谷2006)。また、朝鮮半島でもそれぞれの地域の技術が融合して製作が続けられた状況も想定できる。本稿で検討した朝鮮半島内の状況は、より複雑な様相を実際には呈すると考えられ、日本列島における環頭大刀の変化を考える上でさらに重要な検討課題となる。

以上、百濟製説の再検討の必要性をまず指摘した。加えて、日本列島内での龍鳳文環頭大刀の製作開始時期は、新納Ⅱ～Ⅲ式段階という割合早い段階に開始されていた点を指摘しておきたい。

なお本研究は、21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」の成果の一部である。また、本稿の一部については第3回大学考古学研究会(2006年4月15日・慶應義塾大学)、東北亜細亜考古学研究会6月例会(2006年6月26日・早稲田大学)にて口頭発表を行っている。

#### 註

- (1) 新納泉氏による海北塚例は、龍文意匠がⅠ式の武寧王陵例とⅢ式の一須賀WA1号墳例などとの中間に位置づけられるという点でⅡ式に位置づけられている(新納1982)。従って、Ⅱ式の厳密な定義はなく、海北塚例に前後する資料の位置づけは難しいことを断っておく。
- (2) 穴沢・馬目氏によって龍文の意匠に複数の系統がある事実が指摘されたが、基本的な変遷は共通している(穴沢・馬目1986a, 1986b)ため、本稿では新納編年の表記に従う。
- (3) K128、K224は慶應義塾大学民族学考古学研究室・安藤広道氏のご厚意で調査させていただいた。K128には、柄縁部の筒金具と想定できる銀製板状部品や銅地金貼製貴金具断片が残存している。銀製筒金具、銅地金貼製貴金具という柄部装具の組み合わせは、技法cを用いるⅢ式の龍鳳文環頭と共通しており、環頭部を除いた装具の製作には変化が見られないことが確認できた。
- (4) 洛東江中流域は時代によって百濟・伽耶・新羅諸勢力の影響や支配領域が変化しており、厳密な意味で「伽耶」勢力による製作であるかについて判断は難しい。その意味では、「洛東江中流域系」とでもするべきであるが、本稿では便宜上「伽耶系」と表記しておく。

#### 引用文献

- 穴沢味光・馬目順一 1976「龍鳳文環頭大刀試論 ―韓国出土例を中心として―」『百濟研究』第7輯 229-263頁  
忠南大学校百濟研究所
- 穴沢味光・馬目順一 1984「三国時代の環頭大刀」『考古学ジャーナル』236 16-20頁 ニューサイエンス社
- 穴沢味光・馬目順一 1986a「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列―福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単竜環頭大刀によせて―」『福島考古』第27号 1-22頁 福島県考古学会

- 穴沢味光・馬目順一 1986b「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布 ——一つの試論——」『考古学ジャーナル』266  
16-22頁 ニューサイエンス社
- 穴沢味光・馬目順一 1993「陝川玉田出土の環頭大刀群の諸問題」『古文化探叢』第30集(上) 367-385頁 九州古  
文化研究会
- 大谷晃二 2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪  
府立弥生文化博物館・大阪府近つ飛鳥博物館共同研究成果報告書』145-164頁
- 新納 泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 110-141頁 史学研究会
- 新納 泉 1987「戊辰銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号 47-64頁 考古学研究会
- 新納 泉 1989「王と王の交渉」『古墳時代の王と民衆』古代史復原6 145-161頁 講談社
- 橋本英将 2003「外装からみる装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究会 131-144頁 鉄器文化  
研究会・大手前大学史学研究所
- 町田 章 1986「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』277-300頁 山本清先生喜寿記  
念論集刊行会
- 町田 章 1976「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊 75-107頁 奈良国立文化財研究所
- 町田 章 1987「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』84-98頁 島根県教育委員会
- 松尾充晶 2003「身分表徴としての装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究会 145-164頁 鉄器  
文化研究会・大手前大学史学研究所

#### 図版引用文献

- 図1 1. 新納 1989 2. 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2003『北牧野古墳群』斧研川荒廃砂防事  
業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3. 4. 5. 6. 新納 1982
- 図2 皇南大塚：大韓民国文化財管理局文化財研究所 1993『皇南大塚Ⅱ(南墳)発掘調査報告書』 昌寧校洞：  
町田 1976 新村里：穴沢味光・馬目順一 1976「龍鳳紋環頭大刀試論—韓国出土品を中心として」『百済研究』  
7 229-263頁 忠南大学校百済研究所 武寧王陵：新納 1989
- 図3 1. 福岡大学人文学部考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調  
査／佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室調査報告第3冊 2. 後藤守一 1928「原史時代武  
器と武装」『考古学講座』第1巻、第6巻 国史講習会・雄山閣
- 図4 1. 上総山王山古墳発掘調査団 1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会 2. 筆者撮影  
(早稲田大学蔵)

なお、発掘調査報告書は紙幅の関係上省略したことをご了承願いたい。